

[研究ノート]

# 離島における畜産的土地利用

## —筑前大島における公営牧場を事例として—

人 見 五 郎

### 目次

1. はじめに
2. 大島の概況
3. 大島における牧畜の推移と公共牧場
4. むすび

### 1. はじめに

わが国には、有人離島が254島（105市町村）存在する。平成12年の国勢調査による離島在住人口は45万6千人で、全国の人口に占める割合はわずか0.36%にしかすぎない。ただ人口減少、高齢化、産業の衰退などは、日本の山間過疎地域と比べても深刻な様相を呈しており、言わばわが国の過疎地域の「先行事例」を示しているとも言えるだろう。

筆者はこれまで南西諸島を中心に離島の農業、とりわけ畜産的土地利用について調査、研究を重ねてきた<sup>(注1)</sup>。南西諸島も過疎、高齢化など様々な困難に直面しながらも、本土との気候的差異、豊富な自然資源、島文化を観光資源として、島の独自性を打ち出しながら農業や観光での島おこしに取り組んでいる。

離島はその存在形態によって、様々な特徴をもつ。図1は、その特徴を模式的に示したものである。

この図が示しているのは、本土との距離が離れるにしたがい島の気候風土、自然環境、生活文化などが本土のそれと大きく異なってくる。その差が広がれば広がるほど、産業、観光面で優位な独自性を発揮することが可能となる。さらに島の大きさ、人口規模が大きくなるほど島の経済的基盤、生活基盤が多様化してくるのである。つまり距離が離れるほど気候条件が変わり、本土にない特産品や観光資源を持つことができ、また島の面積が大きく人口規模が大きくなるほど、生産部門のほか消費部門にも様々な産業や業態が必要となり、就業機会が増えると共に経済や生活が多様化するのである。

逆に本土との距離が近く島の規模が小さいと、産業面での優位性も観光面での独自性も発揮することが難しく、人口規模も小さいので多様な産業や就業機会をもたらすことも難しくなる。

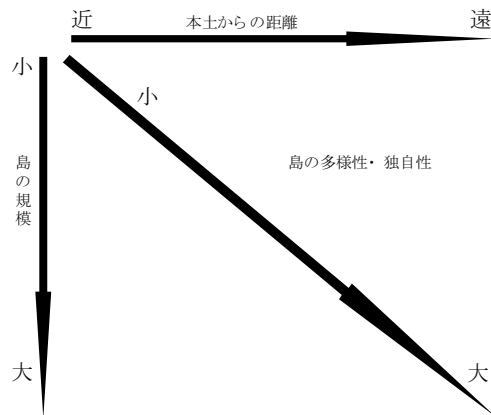
本稿で取り上げる筑前大島とも呼ばれる大島は、宗像市に属する福岡県最大の離島である。福岡県には有人の島が以下のように10島ある。

馬島 (北九州市小倉北区)、藍ノ島 (北九州市小倉北区)、地島 (宗像市)、大島 (宗像市)、相島 (糟屋郡新宮町)、志賀島 (福岡市東区)、玄海島 (福岡市西区)、能古島 (福岡市西区)、小呂島 (福岡市西区)、姫島 (糸島郡志摩町)

これらの島は、面積も小さく、人口規模で50名～数百人であり、先の図から言うと本土との距離の面からも、規模の面からも多様性が発揮できない島といえることができる。

大島はこれらの島の中で人口862名 (平成17年度国勢調査) で農林漁業も他の

図1 離島の多様性の模式図



島に比べると成立している島である。この島を対象に「本土近接離島」の現状を検討していきたい。特に大島で取り組まれているきわめて特徴的な施設である公共牧場を中心に分析を行いたい。

なぜ畜産に焦点を当てるかというと、島の産業というと漁業がまず第一に挙げられるが、島の経済を持続的な安定性を確保するためには、島の農的土地利用もきわめて重要だからである。この重要性については本論の中で述べていきたい。

## 2. 大島の概況

大島の概要について、まず簡単に触れていきたい。大島は宗像市神湊の沖合い6.8kmに浮かぶ島であり、東西3.2km、南北2.7km、総面積7.5平方kmの大きさである。大島は大島村として存在していたが、平成16年に宗像市と合併している。地形は平野部が少なく、島全体が山地形状にある。

人口は、明治時代から1,600名前後で長く推移してきた。終戦後の昭和22年に復興などで一時的に2,200名に膨れ上がったが、その後一貫して人口減少が続いている。最近の国勢調査の数字では、平成12年961名、平成17年862名と1千名を割って減少が続いている。また65歳以上の高齢化率は38.5%で、隣の地島の43.6%について宗像市内で最も高い。

集落は主に島の南面に位置し、漁港、漁協、市庁舎、市総合開発センター、郵便局、診療所、小学校、中学校、宗像大社中津宮などがある。その他に北面に岩瀬、西面に津和瀬の集落がある。大島と本土を結ぶ航路は、神湊からフェリーが片道25分で1日7往復されている。島内の交通は、周囲を舗装道路が完備されているがバスなどの公共交通機関はない。

島の主要な産業は漁業である。大島は北九州市、福岡市という大市場の中間に位置していること、沖ノ島をはじめ良好な漁場に漁業権を有しているため、古くから漁業の島として大島の経済を支えてきた。漁獲高の推移を表1で示す。

表1 宗像市の漁獲高の推移 (単位:t, 千円)

年次	鐘崎		大島		地島	
	漁獲高	金額	漁獲高	金額	漁獲高	金額
平成11年	4,365	2,445,990	1,582	96,353	163	224,138
平成12年	4,367	2,687,966	1,554	1,010,206	127	199,015
平成13年	4,287	2,410,534	1,835	1,005,888	118	182,528
平成14年	4,772	2,667,746	2,218	1,112,301	129	216,212
平成15年	5,133	2,612,092	1,899	847,965	210	191,319
平成16年	5,916	2,701,748	2,863	1,025,195	237	257,939

注) 港勢調査、漁港業務報告書

注) なお宗像市には神湊漁港があるが漁獲高が少ないので省略した。

この表から見ると、大島の漁業は10億円前後の漁獲高がある。鐘崎が福岡県下最大の漁港であり、大島は離島にもかかわらず相当の漁獲高を示している。大島は福岡県下でも重要な漁港のひとつに数えられている。ただ漁船の規模で比べると、鐘崎が5トン未満の漁船の割合が56.8%であるのに対し大島は73%を占め、漁船の大型化については立ち後れており、規模の零細性が目立つ。漁業の形態は、鐘崎がイカ漁、はえ縄漁が中心であるのに対し、大島は刺し網漁が中心となっている。その他大島では採貝も行われている。

次に大島の農業を見てみると、表2は大島の農家数と経営耕地を見たものである。

表2 大島の農家数と経営耕地の推移 (単位:戸・a)

年次	農家戸数	耕地面積	水田	畑	樹園地
平成2年	45	2,864	1,775	561	528
平成7年	39	2,561	1,586	530	445
平成12年	35	2,452	1,703	311	436
平成17年	24	1,800	1,200	100	400

注) 農林業センサス『福岡県統計年鑑』

この表から分かるように、農家戸数の減少と耕地面積の減少が著しい。農家は専業農家は存在せず、漁業その他との兼業であり、わずかな農地を活用して農業が行われていたが、その農地すら改廃されている。樹園地での主な品種は

夏みかんである。大島では、農業のウエイトは非常に低く自家飯米、家庭消費用の域を出ないレベルである。しかも高齢化で農業に従事する人が減り、わずかな距離の本土に行けばスーパーで様々な農産物を手軽に購入できるので、手間をかけて農業を継続する意味があまり無いのかもしれない。ただ、平成2年の段階で28ヘクタールの農地があり、潜在的にはさらに多くの農地があるにも関わらず、それに対して有効な手だてが打たれていないのは、島の多様性を考える上で非常に残念である。

大島の観光資源は自然と歴史に恵まれており、宗像大社中津宮、安昌院、御嶽山展望所、市営牧場、風車展望台、砲台跡、夢の小夜島など様々な見所がある。特に市営牧場、砲台跡、風車展望台のあるエリアは、日本海をバックに非常に素晴らしい景観を呈している。しかし、バスなどの交通機関もなく、サイクリングも山岳地形で適さないため、簡単にこれらの観光スポットを訪ねることは難しい。夏の海水浴シーズンを除くと来島者の中心は釣り客になる。また新しい観光の名所として「筑前大島温泉さざなみ館」が造られていたが、温泉ポンプの不調で現在休業中である。開業中は温泉目的の来島者も多かったが、再開に向けては現在検討中である。

観光は離島の重要な産業の一つではあるが、本土近接離島である大島の場合ほとんどの観光客は日帰り客である。また本土との距離が近い大島ならではの観光の魅力も乏しいのが現状であり、「是非大島に行きたい」と思わせるような吸引力に欠けていると言わざるを得ないだろう。

島の生活について元村長のK氏に聞き取りをしたところ、人口が1千名を下回った頃から島の活気が一段となくなってきたという。つまり、島民の人口が減少し高齢化が進めば、経済面でも購買力が低下し、島内の商店や飲食店は沈滞していかざるを得ない。沈滞すると商品の品数も少なくなり、さらに客が遠のくという悪循環に陥ってしまう。現在ではほとんどの必需品は宗像市内の大形スーパーなどで購入されている。

大島の産業を見た場合、漁業が主要な産業ではあるが、それ以外の農業や商

業などの産業が完全に衰退してしまっている。また観光にも活路を見いだせない状態にある。それらの衰退ないし停滞が漁業の発展をも阻害しているのである。

### 3. 大島における牧畜の推移と公共牧場

大島では、古くから牧畜が盛んに行われていた。江戸後期の安政年間には、福岡藩において野北の牧馬、萩尾の牧牛とともに足腰の強い大島の牛として有名であった。明治39年の『福岡県地理全誌』においても「大島や萩尾の牧牛、野北の牧馬、都市近郊の豚や乳牛の飼育は一般有畜農業と共に顕著である」と紹介されている。明治41年には、牧場面積98町歩、飼養頭数536頭という数字が記録されている。大島は先に述べたように、耕作地に適した場所が少ないという地形的ハンデを克服するため、農家・漁家が山林原野で飼養が可能な牛の生産に熱心に取り組んできたのである。当時は朝簡単な堀切や石積みの囲いを施した牧野に牛を放ち、夕方連れて帰るという方法で飼育されていた。

このような歴史的な背景をもつ大島であるが、戦後も畜産は熱心に行われている。昭和24年には、旧陸軍に砲台用地として接収されていた用地を村に払い下げられたことを契機に、牧野復興事業の適用を受け、島の北部の現瀬山牧場一帯を整備している。

大島には三つの牧野があった。瀬山牧場、大牛牧場、中津和瀬牧場である。いずれも村有地で古くから島民の入り会い牧野として利用されていた。

昭和30年代以降の大島における飼養戸数と飼養頭数の推移を見ると（表－2）、昭和30年代は飼養農家戸数約60戸、飼養頭数約150頭である。これは当時の総農家戸数が約210戸であったので、約3割の農家が牛を飼養していたことになる。

その後、牛の飼養農家は減少していく。これは使役牛としての飼養目的がなくなり、肉用牛生産の収益性が低いこと、農家そのものの減少、農家の高齢化などによるものである。本来ならば、この流れの中で大島における肉用牛生産

表3 大島の肉用牛の飼養状況 （単位：戸・頭）

年 次	飼養戸数	総飼養頭数	肥育頭数
昭和36年	62	150	—
昭和39年	63	175	—
昭和46年	26	74	—
昭和49年	15	114	—
昭和55年	11	161	56
昭和60年	7	317	180
平成 2年	4	290	172
平成 7年	2	250	134
平成12年	2	257	189
平成17年	1	204	130

注) 福岡県農政部畜産課

は消滅していくところである。

昭和45年に、離島草地開発事業によって村営牧場が整備、建設された。村営牧場の建設の目的は、肉用牛飼養農家のサポートもさることながら、島内で新たな雇用機会をつくることに大きなねらいがあった。高度経済成長下にあつてとりわけ離島における労働力の流出は深刻な問題であり、数少ない就業の場のひとつとして村営牧場を位置づけられたのである。また村営牧場は常雇いの雇用機会のほか、冬季の天候不順で出漁できない時などに草刈りなどの日雇いの就業機会を提供するねらいもあった。

一般の公営牧場や入り会い牧野は、地域の畜産農家の補完機能を目的として設立され維持されている。そのため畜産農家の減少や飼養頭数の減少によって公営牧場は縮小、閉鎖されるものであるが、大島においては雇用政策の意味合いが強かったため、独立した生産主体として牧場の基盤を整備していくことになる。現在の大島牧場の概要は図2で示されている。

図2 宗像市営牧場の概要

## a) 施設概要

瀬山牧場		大牛牧場		中津和瀬牧場	
牛舎 (1号)	85㎡	育成牛舎	312㎡	避難舎	127㎡
牛舎 (2号)	603㎡	育成牛舎	129㎡		
牛舎 (3号)	501㎡	分娩哺育牛舎	180㎡		
牛舎 (4号)	140㎡	避難舎	249㎡		
牛舎 (5号)	127㎡	堆肥舎	68㎡		
堆肥舎	174㎡	サイロ	5 基		
サイロ	7 基	パドック	1500㎡		
避難舎	33㎡				

## b) 飼料基盤

放牧草地	69ha
放牧草地	69ha
採草地	4 ha
飼料畑	2 ha
野草地	48ha

## c) 飼養頭数 (平成18年2月)

繁殖雌牛	64頭
繁殖雄牛	2 頭
肥育 (去勢)	73頭
肥育 (雌)	64頭
野草地	48ha

## d) 生産機械装備

ブロードキャスター	1 台	トラクタ	1 台
フォーレジハーベスター	1 台	ブラウ	1 台
マニアスプレッド	1 台	ローラ	1 台

## e) 従事職員: 5 名 (うちパート 2 名)

大島村営牧場の特徴は、生産の一貫経営を志向したことである。一般的に離島の肉用牛生産は島内の草資源を活用した繁殖経営が主体で、島外からの濃厚飼料を必要とする肥育はコスト面から敬遠されている。大島で一貫生産が行われたのはいくつかの理由がある。まず第一に、福岡県内で和子牛生産があまり行われていないため、子牛市場が八女市場に限定されていることである。しか

も市場が小さいため価格形成力も弱く、高価格を期待するには熊本市場にまで搬送しなければならない。つまり市場までの距離が遠いため、輸送費が割高になってしまうのである。

第二に、村営牧場の生産方式が、牧牛による種付けと放牧主体の育成であるため、血統重視の和牛市場においては評価が低く、放牧主体の子牛育成のため体重も少なく期待されるような価格が形成されないことである。つまり売れ残った子牛対策の側面もあったのである。

第三に、牧場の専従職員の年間を通じて仕事を確保するためである。放牧主体の繁殖生産は低コスト生産が可能であるが、年間を通じた恒常的作業はあまりない。そのため年間を通じた作業のある肥育生産が必要となってきたのである。

年間の出荷頭数はひと月5頭、年間60頭程度が出荷されている。毎月1頭分を島内で販売すると共に、宗像市の産地直売場でも「大島牛」のブランドで販売されている。

大島の肉用牛生産は島の雇用対策の側面が非常に強く、経営的には非常に厳しく、販売収入に市から一般財源を投ずることで経営が維持されている。

肉用牛生産を経営的な側面から見ると、繁殖経営部門は牧牛方式であるため種付けにかかる人件費などの経費はかなり抑えられることになる。しかし、血統面では市場評価は低くならざるを得ない。放牧主体の繁殖生産であるが、牧野のダニが媒介するヒロプラズマの影響によって増体のロスが見られる。この対策には野焼きが有効であるが、野焼きは地形的にかなりの労力が必要となり実施されていない。

また肥育部門があるため濃厚飼料、粗飼料約400トンを目外から購入している。この飼料のフェリーの運送費だけで年間約160万円必要となり、肥育そのものに関して特段の低コスト化がはかられていないのでかなり高コスト構造になっている。

従事職員は、旧大島村の時代から村職員として採用されており、宗像市に合併した後もその状態が引き継がれている。肉用牛生産という営利活動を市職員



が担うという事に関して、多くの地方自治体での営利活動事業が必ずしも成功していない事例を見ると、大島の公営牧場にも同じ事が言えるのではないかとと思われる。

大島牧場を観光施設としてとらえた場合、瀬山牧場は牧場内に遊歩道が設置されており、牧場内に風車展望台や砲台跡などがあり、海と一体になった風景は観光的価値が非常に高く、大島観光の目玉の一つであろう。ただ交通の利便性が低く、牧場内での滞在型のアトラクションもないため、観光牧場としての魅力はけっして高いとは言えない。本来ならば、牧場が大島の観光的多様性の一つになりうる可能性は非常に高いにも関わらず、その可能性を十分に追求されていないことが惜しまれる。

#### 4. むすび

本稿では、近隣の離島の中で唯一大規模な肉用牛生産を行っている大島の公共牧場について、検討を行ってきた。

大島の肉用牛生産を評価することは必ずしも容易ではない。経営的側面からだけ判断すれば赤字経営で即座に撤退すべきである。しかし、大島という離島の歴史的背景、社会経済的問題を考えると公共牧場の果たしている役割は決して少くない。

冒頭に述べた島の独自性と多様性の重要性は、島の自立を考える上で非常に重要である。現在進行しつつある大島の現状は、人口減少、高齢化、産業の縮小という大きな問題に直面している。先のK氏は「このまま人口減少が進み、人口が500名を割り込むことになれば島として何もできなくなるだろう」と指摘している。

現在の島民の人口の流出を防ぎ、人口の自然増を期待することは現実的には不可能である。今後は島外からの流入者をいかに確保するかということが非常に重要になってくるだろう。

その視点に立った時に、公共牧場など諸施設が意味を持つのではないかと考える。また近接離島というハンデも近接離島ゆえに乗り越えられる可能性も秘めていると思われる。「田舎暮らし」を希望する都市住民は少なくなく、農業や漁業に関心を持つ若者も少なくない。これらを受け入れる体制を整備し、積極的に受け入れることは可能である。

例えば、公共牧場を肉用牛生産の研修施設と位置づけて研修生を受け入れていく。そして彼らが島で牧場を経営できるようにサポートしていく事も可能ではないか。そのほかハーブ栽培、陶芸、草木染めなどを希望する人達に農的生活をできるようにサポートしていくことで、都市に販売ルートを確保しながら島で暮らすというライフスタイルを新たに創り出すことも可能である。こういった体制が整うことで、新たな観光資源が島に創設され、島外からの来訪者を増やしていくことにもつながっていくのではないかと。

島が自立して存在するためには島の独自性を高め、多様性を増やす必要がある。そのためには島を多面的に利用するという視点が是非必要である。とりわけ近接離島ではその視点がより必要であろう。大島の事例を通じて大島においても潜在的な独自性と多様性が存在することが明らかになった。今後島民、行政などが一体となって独自性と多様性の掘り起こしをはかっていくことを期待したい。

#### <注>

(1)主なものとして、以下の論文をあげておく。

人見五郎 『離島農業と肉用牛生産』農政調査委員会 1994

人見五郎 「徳之島農業の現状と有畜複合経営」鹿児島短期大学付属南日本文化研究所「南日本文化」25号 1993

#### <参考文献>

『大島村誌』大島村教育委員会 1985

『離島における流通近代化のための調査－屋久島および筑前大島における調査を中心として－』日本リサーチ総合研究所 1978